数えずの井戸

京極夏彦

番町青山家屋敷跡通称皿屋敷に怪事が起きるという評判が巷を賑わし始めたのは、青山家当主青山播磨が惨死し、青山家が廃絶になった直後、秋風が肌に沁み入るようになった頃のことであった。

その怪しき噂は、語る者語られる場所に依ってまちまちで、一向に掴み処なく、またそれぞれが荒唐無稽なものでもあったので、事実として受け取る者こそ殆ど居なかったのだが、彼の屋敷は元より悪しき因縁が語り継がれる曰く付きの土地でもあり、また館自体住む者もなく荒れ始めていたことも手伝ってか、彼誰刻を過ぎてより、番町のその一画に寄り付く者の姿は絶えた。

夜な夜な。

井戸より亡魂出でて。

数を数える――。

それは、そうした噂であった。

日暮れより訪れる者、近寄る者とて居らぬというに、丑三に涌き出ずる冤鬼の幽けき声を誰が聞くのか、その暝き姿を誰が見るというのか。

それでも。

その幽霊はうら若き見目麗しき腰元であるとされた。その女は、漆黒の井戸の孔より浮かび出で、哀切なる声音で、

一枚。
二枚。
三枚。
四枚。
五枚。
六枚。
七枚。
八枚。
九枚。

と――手にした皿を数えると謂う。

数は九で止まる。勘定しているのはどうやら十枚揃の皿であるらしいから、決して数え切ることはない。数えられぬ欠落が悔恨の蒼き焔となり燃え上がって女中の身を焼く。

焼き尽くす。

あな悔しあな哀し、怨めし恨めし一枚足りぬ、欠けておると、女は嘆き身悶え、陰火に焦がされて消ゆるのである。

誰が見た、誰が聞いたということはない。

多分誰も見ておらず、誰も聞いていない。

それなのにそこだけは決まったように同じであった。

誰が語るどんな話であろうとも、何故かそこだけは一緒なのだった。

だが――。

何故その腰元は、毎夜毎夜黄泉路から舞い戻り無間地獄の様を見せるというのか。

その理由の方は、語り手に依って変わった。

或る者はこう言った。

当主青山播磨様、腰元の菊なる娘の類い稀なる美しさにいたく執心致し、その呆け様に激しく嫉妬した奥方様が、菊の盛りし飯に針が混じりし由、主上を害し奉らんとする企みあらんと嘘の奏上、虚言を信じた青山播磨、可愛さ余って憎さ百倍、自らの手で菊を手討ちに致し、井戸に投げ込んだのであると――。

濡れ衣を着せられた菊の遺恨が毎夜井戸から涌き出でるというのである。

否――。

それは違うと言う者もあった。

それでは皿を数える理由が解らぬ。それ以前に青山播磨に妻は居ない――というのである。

或る者はこう言った。

青山家奉公人菊は腰元ならず下女である。身分卑しきのみならず、菊は生来の虚け者、粗相失敗跡を絶たぬ不作法者で、割れば死罪と取り決めの、先祖伝来の家宝の皿を一枚割って、故に手討ちにされたのであると――。

高が皿一枚と引き換えに命を取られたその遺恨こそが、夜な夜な今生に迷い出ずる理由也というのである。

それも違うと言う者もある。

割れば死罪が決まりごとであるならば、割った菊にこそ非があろう。それを憾むは逆恨み。

何よりも、菊が下女風情の身であるならば、曲り形にも家宝とされる大事の品に、手など触れさせる訳もない――というのである。

或る者はこうも言う。

これは復讐であるのだと。

ひと昔前、火付盗賊改役長官であった先代青山鉄山の手で処刑された稀代の盗っ人こそが菊の父であったというのである。

その父の遺恨を晴らすため、菊は青山家に入って仇を為し、家宝をば割り、死して後も祟っておるのだと――。

これもまた逆恨みではあるのだが、凶賊無頼がご政道に刃向かうは世の習い。親の遺恨を子が子に向けたる悲劇、親子二代に亙る因縁也というのである。

それも違うと或る者は言う。

親の遺恨を晴らすため御命を狙うというならまだしも解るが、家宝を割るは筋違い。割れば必ず罰せらるると知りつつ割って、遺恨の晴れる訳もない――というのである。

菊は奸賊に非ずと言う者も多かった。

慥かに菊の父は盗賊で、先代青山鉄山の手でお縄になってもいるけれど、菊はそのことを知らずに育った堅気であるというのである。蛙の児は蛙と謂うけれど、悪党の子即ち悪党と限るものではないだろう。菊なる者が十七八の娘であるのなら、捕物があった時分はまだ童――親の旧悪を知らずと育ったとしても、無理からぬ話ではあるだろう。

悪なるは青山播磨――。

そう唱える者も居る。

否、そう言う者は殊の外多いのだ。菊哀れ、菊無念、そう思わねば怪異話に筋が通らぬからであろう。

そう言う者はこう語る。

生来好色の青山播磨、市井で密やかに暮らす菊の美貌をば見初め、囲い女にせんと強く欲したのだという。

だが、菊には既に想い人、言い交わした相手が居り、播磨の懸想は叶わなかった。しかし播磨は諦めず、菊を我がものにせんとや奸智を巡らせ、父親の旧悪を知るやその暴露を理由に嚇し付け入り、挙げ句無理矢理水仕奉公に召し上げたのである――と。

哀れ生木を裂かるるが如く許婚と引き離された菊は、それでも播磨の執拗な要求を拒み続けた。やがて業を煮やした播磨が菊の許婚を亡き者とするに至り、愈々世を果無んだ菊はわざと家宝の皿を砕き自ら播磨の怒りを買い、進んで手討ちになったというのである。

慥かにそれなら祟りもあろう。

だが、それならばただ怨む筈、皿など数える意味がないと、こう言う者も居るのであった。

されば。

こう唱える者も居る。

菊と播磨は互いに惚れ合っていたのであると。

そうであっても、方や旗本、方や女中、どうであれ身分違いの間柄。所詮は添えぬ仲。そうと知りつつ二人は二世を誓い、誓ったまでは良いものの――。

播磨に良家の子女との縁談が持ち上がったのだというのである。

一説に、変心した播磨が菊を捨て、それでも想い捨て切れず、未練執着甚だしき菊めのことが邪魔になり、家宝を損ねたと因縁を付けて始末したのだ――という。

捨てられた上に罠に嵌められ殺されたのであれば、皿も数えようというものであろう。

また一説に、未練執着を断てなかったのは播磨の方であるともいう。自が身分を弁えていた菊は、偏に播磨の出世栄達を願い、自ら身を引いたのだが、播磨の方は諦め切れず、その武士らしからぬ態度に見切りをつけるため、菊はわざと皿を割り井戸に身を投げた――というのである。

しかし。

そうならそうで、今度は祟る謂れもなくなってしまう。慥かに菊は哀れだが、播磨を好いて死んだなら、祟る所以は何もない。

これは、所謂心中なのだと言う者も居た。

慥かに二人は好き合っていた。しかし播磨に嫁を迎え青山家の栄達を願う親類が、二人の仲を裂くために、菊を陥れたというのである。

どうであれ、家宝を割れば手討ちが決まり。そうなれば、菊を討つのは播磨が役目。

そは濡れ衣と知りつつも、所詮現世では結ばれぬ、身分違いの縁ならば、いっそ来世で添い遂げようと、青山播磨は菊を斬り、追って死んだという筋書きである。

その場合、菊は播磨ではなく、自らを陥れた親類に祟っていることになる。そうならば、人寄り付かぬ荒れ屋敷で皿を数えて何になる。

死して後、一枚二枚と数えるならば、騙した者に聞かすが道理。

どうであれ――。

巷間で語られる番町の怪談は、いずれもどこかに齟齬があるのだ。

そしてその齟齬は、永遠に埋まらぬのである。

何故ならば。

その怪談に関わる者は――。

どうやら一人残らず絶えてしまったからである。

慥かに惨事はあったのだ。

その惨事こそがこの怪しき巷説を生む契機となったことは、言うまでもない。

菊なる女中は事実青山家に奉公しており、その者は実際に屋敷の中で死んだらしい。亡骸を引き取りに来るように長屋に報せが来たという。だが――報せを受けて青山家に出向いたその母静も、また静に同行した菊の幼馴染みである米搗き三平なる者も、長屋には戻らなかった。

二人とも消えてしまったのだ。

そして。

菊の訃報から数日を経ずして、青山播磨は無頼の町人数十名を相手に喧嘩斬り合いの上、死んだ。

当主惨死の報を受け、青山家に赴いた役人は、息を呑んだそうである。

側用人、若党、小姓を始め、家臣奉公人の多くが――死んでいたのである。

番町は俄に騒ぎとなった。

生き残っていた者どもの証言は甚だ曖昧なものでしかなかったのだが、見聞の結果、家人を殺害したのは播磨の朋輩である遠山主膳という浪士であり、この主膳は、どうやら播磨によって成敗されたものと思われた。

主膳もまた。

青山家屋敷内で事切れていたからである。

更に。

青山の家に客として逗留していた大番頭大久保唯輔が娘吉羅、及びその侍女二名も、矢張り斬られて死んでいたという。婦達を斬ったのが誰なのか、それは知れぬことだった。

生き残った数名は、播磨と主膳が斬り結ぶ処は見ていたらしいが、何方が何方なのか、まるで解らなかったそうである。修羅場を避けて身を隠していた数名は、播磨惨死の報せを受けるまで兇ろしくて身が竦み、外に出るは疎か動くことすら出来なかったのであった。

夜半に何かが起きて、菊が死んだ。直ぐに小姓が報せに走り、菊の母と米搗き男が屋敷を訪れた――そこまでは確かなようだった。

その後。

一体何があったのか。

誰にも判らなかった。

隣家の者でさえ青山家の変事には気付かなかったようである。

何かの理由で先ず菊が死に、その結果青山家に何かが起きて、家人の殆どが死んだということだけは確実だった。播磨は生き残り、何も処置をせずに家を出て、そして間もなく死んだのである。

判っていることはそれだけで、その僅かな事実さえもやがて封印されてしまった。

大番頭が隠蔽したのだとも、青山家縁の者が有耶無耶にしたのだとも謂われたが、それは知れぬことである。

巷には、忌まわしき流言だけが残り、それはやがて怪談となった。

菊の亡魂は夜な夜な涌き出でて、
一枚二枚と皿を数える。
三枚四枚五枚。
六枚七枚八枚九枚。
皿は必ず――欠けている。
足りぬから。欠けているから。永遠に満たされぬから。だから数え続ける。数えても数えても数え切らぬ――。
無間地獄。
その番町の怪談は、もう何もかも嘘なのだと言う者も多かった。何故ならそれは、元は播州辺りの話であると謂うのである。いやいやそうではない別の国に残る稗史だ、他の在所の昔噺だ、別の土地の世間話だ誰それの創り話だと、そう言う者も多かった。
それもその筈、同じような物語、同じような筋書き、まるで同じ怪談は、古今に東西に、山と残っているのであった。
こうして。
菊と播磨はおはなしになった。

昔数え

幼い頃から、そうだった。
播磨はいつも、何かが欠けているような焦燥感に追い掛けられている。いつも、背中が空寒い。
揃っていない。足りない。十全でない。
何が欠けているのかが判らない。
罪悪感とも、背徳さとも違う。
それは、何か忘れていることだけは覚えているのに、何を忘れているのかということだけは思い出せない――そんな心持ちであった。
いつもそうなのだ。
播磨は生来温順しい性格であったのだが、童の頃は癇癪持ちだった。
膳の上の椀でも小鉢でも、土間に並んだ雪駄も草履も、持遊でも、何を目にしても、これで全部なのかと疑ってしまう。

勿論それで全部なのである。それだけしかないのだから当たり前のことだ。しかし物心付くまでは、そんな当たり前のことが解らなかった。

だから足りぬ足りぬと訴えた。

足りないのではなく、足りぬ気がすると訴えていたのだが、答えはいつも足りていますというものだった。

そんなことは承知している。全部ある筈なのに、ないような気がするのは何故なのかと、幼い播磨は問うていたのだ。ただあるあると言われても納得は行かぬ。

納得が行かぬから、駄駄を捏ね、やがて癇癪を起こす。

宥められたり叱られたりした。

でも、何故そのような心持ちになるのかは、誰も教えてくれはしなかった。

幼いうちはそれで良かった。

やや長じてくると、今度は慾張りな子と思われ始めた。いや、面と向かってそう言われた訳ではないのだけれど、そう思われているに違いないだろうと、播磨は感じていた。

全部揃うているのに足りぬというのなら、まだ欲しいのかと思うのも道理である。でも、違うのだ。播磨は十を十一にせよ、十一を十二にせよと願うていた訳ではない。

十が九に、思えてならぬだけである。

数ではない。割なのだ。

十割が九割に思えてならぬだけなのだ。

だから、徒に数を増やされても安堵感は得られぬ。満足感もない。香の物を一つ増やされても玩具を二つ与えられても――。

足りぬものは足りぬのである。

幾ら数が増えようと、欠けている気がすることには変わりない。量が増そうと嵩が張ろうと同じことである。どうしたって足りぬように思えるのだから、こればかりは如何にもならぬことである。

如何にもならぬのだ。

でも、慾張りと思われるのは嫌だった。

播磨は、そうした意味では謙虚な質であったのだ。

寧ろ、無慾な童であったろう。

直参旗本青山家の嫡男として生を享け、何ひとつ不足のない暮らし振りで育まれたのであるから、それも当然のことだった。他人を羨むことも嫉むこともなかった。勿論、ひもじい思いなどしたことがない。あれが欲しいこれが欲しいなどと思うたことは、ただの一度もない。

それ以前に――。

播磨は生まれ乍らに武士の子であったのだ。

心中慾を抱くことは卑しいことと、だから播磨は身に沁みて識っていた。

六慾乏しきうえに、武門の嗜みを厳しく躾けられているのだ。また、播磨は能く学び、能く理解した。そうした子供であった。

真面目なのである。
慾があるのではない。
別に何も欲しくはない。
足りないような気がするだけなのである。
軒の夾竹桃を観ても、論語の文字の連なりを視ても、どこか欠けて感じられた。茎の先には総て花が付いており、刷られた文字は隅隅まで読んでいる。それでも、幾本か花の付かぬ茎があるように思われ、読み逃した文字があるに違いないと、播磨には思えてしまうのだ。
読み逃してはいけない。一字一句読み逃さずに誦めよ憶えよと、そう言われた。
そうしたつもりなのだが――。
否、そうしたのだ。
それでも、何か忘れているような気がする。欠けているように思える。
だから播磨はいつも落ち着かない。どこか追い立てられているような、そんな焦燥感に付き纏われている。これで全部なのか、これで揃うているのかと感じてしまう。
それでも、強慾と思われるのは幼心にも屈辱であったし、また真実は目の前にあるものはそれで総てなのだと、やがて気付きもしたから――。
播磨は結局何も言わなくなった。
焦る想いだけが残った。
何か欠けている、何か足りないと想い続けて播磨は大人になったのだ。

播磨は今年で二十五になった。
若年寄の覚えもめでたく、ひと時は火付盗賊改役の頭まで務めた父――鉄山が昨年の暮に急逝し、家督を嗣いだばかりである。
まだ、何の自覚もない。
自覚はないが、覚悟がない訳ではない。
播磨はそういう意味では大人である。立場は弁えている。ただ、それでも何か尻の据わりが悪いのは、矢張り何か欠落しているような気がしているからで、思うに、自分の裡に巣喰っている善くないものというのは偏にその欠落感であり、多分それ以外の何ものでもないのだ。
幼い頃に開いた穴を、ずっとそのまま――埋めることが出来ぬままに、播磨は今日まで来てしまったのだ。
今更乍らにそう思う。
実際は何も欠けていないと気付いてから、播磨はそれをなるたけ無視するようにして生きて来た。剣を振るい身躰を使い、鍛練することでそれは消えて行くようにも思ったからだ。所詮は勘違いのようなものなのだから。
元服してからは剣術に励み、只管腕を磨いた。
剣術などというものは、鍛えて鍛え過ぎるということはない。元元行き着く先などないものである。終わりなきものは欠けようもない。果てなきものは足りようもない。
そう思うたのであった。

でも、それは違っていたようだった。
結局播磨は門下でも一二を争う腕になっていた。
でも、それはそれだけのことだった。外側だけ立派になり、文も武も道を極め、いいだけ齢もとったのだけれど、胸の裡肚の底は変わっていなかった。空虚な欠落感は些とも埋まっていなかったようだ。
父が死に、青山家の当主となって。主が座る席に就いた途端に。
それはむくむくと頭をもたげた。
何ひとつ欠けていないのに、何か――。
――欠けている。
お父上を失われた哀しみ故でござりましょうと用人は言った。
慥かに、それはそうなのかもしれぬ。
母は疾うに逝ってしまっていたし、播磨にとって父は唯一の家族であったのだ。
ただ、侍の父子である。べたべたと可愛がって貰った覚えはない。
父はお役目第一の厳格な人柄であったから、あまり家裡で過ごすこともなかった。親子で過ごした時は僅かで、その僅かな時の中で交わされた会話もまた少なかったと思う。
それでも播磨は父が嫌いではなかった。父上父上と慕い甘えた覚えこそないけれど、一緒の時は安心したし、長じてからは様様な意味で尊敬していた。その父が突然居なくなってしまったのであるから、まあそうなのかもしれぬと、一時は思った。

でも。
でも、そうではなかったようだ。
淋しいとか哀しいとか、そうした気持ちはちゃんと別にある。別にあって、そちらはちゃんと御せている。
親が死んだからといって延々泣き暮らしたりする程に、播磨は子供ではなかった。作法通りにきちんと送り、作法通り喪に服した後、播磨の中の、父への想いは片付いている。なる程慶弔の祭礼というものは斯様な効果があるのだと、播磨は至極納得したものである。
死者を送るということは、即ち生者の中でけじめをつけるということなのだ。
古来よりの作法に則り、大仰にあれこれと執り行うのは、死者に対する礼というより、残った者送る方の者が、人の死をきちんと解するための手続きであるのだろう。飾られた祭壇を目にするのは死者ではなく生者なのである。読経の声を聴くのも鉦鼓の音を聞くのもまた、弔う者の方である。
父は死んだ。
棺に収まり埋められて、父の骸は土に還った。魄は地に染み魂は天へと昇り、位牌に寄り付くのは思い出だけである。もう二度と言葉を交わすことは叶わぬし、触れることも見ることも出来ぬのだ。
死んでしまったのだから。
儚い想いに駆られたのは、棺を埋めたその瞬間だけだった。

播磨は、きちんと父を送ったのである。
ただ。
葬儀法要の間中、播磨が矢張り落ち着かない気分でいたことは事実である。
手順はこれで良いのか。
何か忘れてはおらぬか。
飾りはあれで全部であるか。何か抜けているものはないか。樒はあるか供物はあるか。燈籠は足りているのか。僧侶は、縁者係累は揃うておるか。
数珠玉の数はあっているのか。
ひと粒欠けていたりはせぬか――。
欠けている訳はなかった。それでも、そんな想いだけが去来していた。
矢張り。
――この三千世界は、何か足りないのだ。
ほんとうに欠けているのではないか。何が欠けているのかは知らないが、この世は不完全なのだ。
そう思うと少し気が楽になる。
そう思わないと――。
自分が狂うているような気になって来る。
播磨は姿勢良く立ち上がり、襖障子を開けて縁側に出た。庭を見渡す。

父も、能くそうしていた。
幼い頃から見慣れた庭である。この庭も、多分何かが欠けているのだ。
庭は平素の庭だった。
苔生した飛び石に垣内柳。低木に小池。石燈籠。何も変わらない。播磨が生まれてからの二十と余年、この庭は全く変わっていない。
石は磨り減ったか。風で少しは丸くなったか。
柳は育ったかもしれぬ。衰えたかもしれぬが、枯れてはおらぬ。春柳は青青とした勢いこそないが、若い芽を付けた枝がそわそわと風に戦いで、生きておるぞと告げている。
童の時分はあの柳が怖かった。
随分と昔の話である。播磨は変わったが、庭は変わらぬ。つまり、この庭はこれで総てなのだろう。
――いや。
違う。
播磨は庭に降りる。
もう、何年も降りていない。用がないからだ。
庭など愛でずとも困ることはない。やっとうの稽古をするにも余計なものが多過ぎる。足許も苔だらけで甚だ宜しくない。そもそもこの庭は、じめじめ湿っていて気が滅入るのだ。柳が繁る程だから水気が多いのだろう。

水捌けの悪い土地なのだ。
ぐずぐずとした苔を踏み乍ら、播磨は柳木へと近付いた。
――そう。
柳の横に。柳に抱かれるようにして。
ざわざわと垂れた枝が騒ぐ。
播磨は更に一歩近付く。
――あった。
庭が、欠けていた。
柳の根元には、深く深く穿たれた、真っ黒な穴があった。
井戸だ。
否、井戸だった穴だ。
もう、使っていない筈だ。涸れたのだろうか。それとも使わぬ理由が別にあるのだろうか。
播磨は知らぬ。これだけ水気の多い地所であるから、涸れることはないだろう。
現に、穴の縁には苔がたっぷりと生えている。地面にあるのは緑色のぬるりとした丸い縁取りである。穴の中は、只管に暝い。
何処までも暝い。
埋まっている訳ではない。ならば、水はある。
でも、もう誰もこの庭井に近付く者はいない。

常井は別にある。つまり、この穴は無駄な穴なのだ。
庭の――欠落した部分だ。
――ああ、庭が欠けている。
この無駄な穴は、庭の足りぬ部分である。こんなものは不要だ。使わぬ井戸なら埋めれば良いのだ。埋めずにあるなら、それは地べたが、庭が欠落しているだけではないか。
円く、深く、欠けている。
いや――もし、この穴が奈落に通じる程深いものであるのであれば、この穴こそが世界の、この三千世界の欠けた部分なのかもしれぬ。
足りぬのは、欠けているのは此処なのだ。
播磨は漆黒の円窓を見詰めた。
何も、なかった。
虚ろだ。
これが播磨の胸に巣喰った、欠落そのものだ。
そう思うと、大層心持ちが楽になった。播磨は、生れてからずっと追い求めていた失せ物を見つけたような奇妙な昂揚感に見舞われる。
――こんな処に穴があるから。
だから、何か足りぬような気がしていたのに違いない。大体使わぬ井戸であるならば、埋めてくれれば良かったのだ。

埋めてくれていたなら。

この井戸さえ埋めてあったなら。播磨はこんな、こんな落ち着かぬ毎日を二十余年も送ることはなかったのではないか。いや、そうに違いない。

そうだ。

この穴が――。

播磨は屈み、穴の真上に自が顔を突き出した。

何もない。何も見えない。ないのだ。何も。

穴は、欠落そのものである。

これが欠けの正体じゃ。

――いや。

それはどうか。

昂揚感はすっと引いた。

それは逆だ、と思うたのだ。

もしこの井戸が埋められていたならば。

播磨はこうして、欠落そのものを目の当たりにすることなど出来なかった筈だ。そうであったなら、播磨は未来永劫己の理不尽な欠落感に呵まれていたに違いない。

そもそも井戸と己の性質の間に因果があろう筈もないのだ。播磨は己の心の病根を、一瞬この古井戸に仮託してみただけなのである。凡ては気休めに過ぎぬ。

気の迷いだ。

身を起こし、立ち上がる。

いずれ、埋められていなかったのは良かったことやもしれぬと、そんな風に思った。

――莫迦莫迦しい。

柳の枝を一本引き千切った。

その時。

播磨の名を呼ぶ声がした。

用人の柴田十太夫の声であった。

お出でで御座りまするぞと、声は言った。

相わかったと播磨は応えた。

御側用人の十太夫は、疾うに四十を過ぎている。

つまり十五以上齢上ということになるのだが、どういう訳か余り年齢の差を感じない。父が逝った時、お仕えして二十年というようなことを言っていたから、額面通りに受け取れば播磨が五つばかりの時分よりこの家に居ることになる。記憶は不確かだが、そんなものだろう。

だが、幼い頃から一緒に居るからといって兄小父のように捉えているのかといえば、それは明らかに違う。用人は用人で、縁者でも朋輩でもない。今は家来である。

多分――。

十太夫は物腰が軽いのだ。

それでもこの男は、所謂忠臣なのだろう。亡父に対する接し方を観ているだけで、それは青二才の播磨にも十二分に伝わった。勤勉で実直で、日夜父のため――否、今は播磨のため、この青山家のために、十太夫は粉骨砕身、休む間もなく忙しなく働いている。何処を探せばそんなに仕事があるのかと思う程だ。

ただ、それ故か十太夫には重みが欠けている。少なくとも年長者としての風格はない。武士としての威厳がないと言い換えても良い。それは身分故の結果ではなく、人品骨柄が既にしてそうなのだと播磨は思う。

悪いことではあるまい。ただ。

――此奴も欠けておる。

申し分ない家来ではあるが、人としては矢張り足りぬ気がする。

お待ち兼ねでございまするぞと十太夫は言った。

「また平素の話であろう」

「左様に存じまする」

「ならば急くこともない」

縁に控えた十太夫は僅か顔を上げた。窮した面相である。

「妙な面構えじゃ。不都合か」

不都合なのだ。播磨の振る舞い如何に依って、客は間違いなくこの忠臣を責める。

十太夫は問いには応えず、お早くお支度を、と小声で言った。

「身内に会うのに支度など要らぬ。このままで良かろう」

訪れたのは伯母の真弓だ。

「しかし殿」

十太夫は怖ず怖ずと播磨の月代に視軸を向けた。

「日毎の理髪は麾下の嗜み――であるか」

月代に手を当てる。

ちりちりとした手触り。

「剃る間はあるまい。それこそお待たせすることになる。このままで良い」

播磨は井戸に背を向け、わざと石を除け苔を踏むようにして庭を抜け、縁に上がった。

「案ずるな。伯母上の苦言は甘んじて儂が受けよう。御側に一切の落ち度はないと、そう申し上げよう」

参りましたなと忠臣は苦笑いをした。この軽みが威厳を損なうのである。

「仏間に居られるのだな」

伯母は、来れば何時でも仏間に居るのだ。

父が忘れられないのだろう。

廊下が暗く感じられる。

先を行く十太夫の羽織の肩口が少し綻びている。きちんとした男であるから、綻びのある衣類を身につけることは考え難い。多分気付いていないのだろう。

肩と袖の縫い目がほんの僅か開き、糸が覗いている。
目が離せない。
知らせるべきだろう。一言、綻びておるぞと言えば済む。言ってしまえば綻びなど観続けるまでもない。
何故か言い出せなかった。
齢上とはいえ主従の間柄である。遠慮がある訳でもあるまい。そもそも慮らねばならぬような事柄ではない。何故言えぬのか。
能く解らなかった。解らぬから余計に気になる。気になるから目が離せない。
二針分。
結局、御側の肩先を凝視しているうちに仏間に着いてしまった。
十太夫が襖を開けると、のっぺりとした伯母の顔が覗いた。
仏壇の横に座っている。
伯母は黒目がちの眼で播磨を見据え、何も言わずに横を向いた。
「伯母上、よくお出でくださいました」
「心にもないことを申されるな播磨殿」
弦を擦るような声音だ。
伯母の真弓は父の姉であるから、既に五十路も了る頃である。それなのに、まるで搗きたての餅のように白く柔らかい。触れたことなどないが、どう観ても柔らかい様子に映る。

眉のない眼。
真っ黒な口中。
顔面に穿たれた五つの穴。
播磨には、嫁いだ女性の顔はみな同じに見える。眉を落とし、歯を染めてしまえば、顔などどれも同じだと思う。
実際、他家の奥方も町衆の女房も播磨の中では同じ面相だ。記憶の中の母でさえ、同じ顔をしている。
白っぽい肉に穴が五つ空いているだけだ。それしか思い出せない。それは、今眼前に座っている女の顔と大差のないものである。
髷の形がどうの半襟の色がどうの、そうした上乗せされた差異は、播磨にとってあまり意味のないものだ。衣など着替えてしまえば何とでもなる。髪形も結い直せばどうにでも変わろう。
匂いもそうだ。
例えばこの伯母と、亡くなった母は同じ匂いだ。匂いといっても体臭ではない。鬢付の匂いか焚き染めた香か、匂袋か、いずれそうした、付け加えられた匂いである。
だから声と、肌の色や質で区別するよりない。
伯母は、三線を弓で擦るような音を出す、白くて柔らかいものである。
顔には五つの足りぬところがある。
漆黒の井戸が、ぽかりと開いて、広がった。

「またそのように」
井戸はそう言った。欠落した奈落の底から、弦を擦るような音が涌き出た。
「現を抜かしておられるか」
「面目ない」
忤わぬようにしている。それ以前に、実際播磨は現に居らなんだ。
「また――嫁娶りの話でございましょう」
「またとは何ごと。縁談が幾度もあるということは即ち纏まらぬということではないか。一度で成れば二度はないのじゃ。吾が幾度もこの家に足を運ぶことになるのも、何ごとも其方様の心得違いに依ることではないか」
承知しておりますと播磨は答える。
「いまだお役の沙汰もないのであろう」
「ございません。役替の時期ではないのです」
だからこそ今が大事なのじゃと伯母は言った。
「いざという時、ご奉書が届くか否かはいずれ日頃の精進故。役替の時に登城の支度を済ませてご奉書を待つくらいの気概がのうては、栄達は叶うものではない」
寄合には顔を出しておりましょうな、と伯母は重ねて問う。
「平素の交流は肝心ですぞ」
苦手だ。

寄合は無役直参の役職である。
無役の役とは矛盾の窮みであるが、勿論それはただ役職のない士分が寄って集まるだけのものではない。寄合には臨時の職が月番で順次割り当てられることになっている。
播磨は未だ何もしていない。
「青山家は千四百石、本来なれば小普請の石高」
伯母は播磨を睨む。
「若輩の其方様が寄合に編入されたは、遍く青山の家筋の格故のことなのですぞ」
真弓は謡うようにそう言った。
「家筋が良いばかりに上納金が掛かりまする」
百石につき二両を納めるのが寄合の決まりである。青山家の上納額は二十八両にもなる。
痴れ者と伯母は小声で言った。
「無役とはいえ勤勉を心掛けておれば、いずれ道は拓けるのじゃ。小普請組とは違うて寄合は若年寄支配、辛抱し励んでおればお目にも止まろう。善いか、肝煎様の覚えめでたければ良きお役にも付けようぞ。お役次第では石高も増そう。寄合金など」
伯母はそこで言葉を詰まらせた。
それから、二つの黒い穴で播磨を再度見据えた。
「播磨殿。其方様は、いつからそのような下賤な金勘定をされるような人品に成り下がられたのです」

「いや――」
「まだあの悪しき朋輩どもと切れていないのですか」
「悪しき朋輩とは」
「あの部屋住の無頼漢どもです」
伯母の言うのは白鞘組のことである。
これは播磨が通う道場の同門――主に部屋住の若侍どものことである。組といっても揃いの白い鞘を誂え、白鞘組と称して徒党を組んでいるだけだ。他愛もないものである。
「連中は――」
悪しき者どもではありませんという言葉を、しかし播磨は呑み込んだ。
荒ぶることをして悪しきこととするのであれば、法外の乱暴狼藉は働かぬと雖も、連中は充分に悪い。
「其方様は既に青山家の当主。部屋住の次男坊三男坊とは立場が違うのです。そもそも家の格が違いましょうぞ。百石二百石の小旗本や御家人と徒党を組んで暴れたところで、得るものは何もありませぬぞ」
「得るものは」
ない。
足りない気がするだけだ。
何をやっても、どうせ何か足りない。

「それも承知しておりまする」
播磨は頭を下げた。
そもそも、播磨は連中――白鞘組――と一緒にいるのも厭になり始めている。
厭というなら――。
寄合と同じくらい厭だ。
遊び仲間という意識もない。
何もない。
尤も、組を作った当初は何かあるように思えたのである。でも、何もなかった。所詮は何も変わらない。何も起きない。足りぬ気がするのは同じことである。
町奴と喧嘩をする程度のことしかしない。
播磨は腕が立ったから何かと頼りにされたのだけれど、喧嘩といっても威嚇するだけで相手を斬り殺す訳にはいかぬ。旗本と雖も街中で鯉口を切れば咎められる。どれ程相手が非道でも無礼討ちなど出来る訳もなく、侍と町人が殴り合うというのも滑稽であるから、結局は言い合いである。怒鳴る。怒鳴って脅す。
くだらない。
威勢の良い方が勝つ。否、勝った気になるだけである。
勝てば美酒を酌み交わし、負ければ自棄酒を喰らう。
女を抱く。

あまり、面白くない。
播磨は酒が嫌いだし、色の道にも淡泊である。
播磨はきっと、何かに酔うということがない性質なのだろう。播磨にとって酔いとは単なる混濁でしかなく、悪心でしかなかった。女色にしても同じことで、溺れる前に醒めてしまえば後は面倒なだけだった。
一夜明ければ恐ろしい欠落感に襲われるだけだ。
ただ。
遊女は、他の女と違って識別出来た。
あの女達は母と同じ顔ではなかった。
ただ、顔を合わせても話すことなどなく、重なるのも億劫ではあった。でも何も言わずとも何かしら話はしてくれたし、相槌を打っているうちに会話をしたような気持ちにはなった。満ちることはなかったが、更に欠けることもなかった。
だから、播磨は吉原に行くこと自体はそれ程厭なことではなかった。
但し、厭でこそなかったのだけれど、遊里に行く理由にするために喧嘩をしたりすることの意味が、どうにも播磨には解らなかった。行きたければただ行けば良い。呑みたければただ呑めば良い。景気付けだの精進落としだのと何かと理由をつけたがる連中の気が知れぬ。そもそも理由になっていない。
だから近頃は白鞘組とも疎遠になっている。

「父が身罷って後は顔を合わせておりませぬ」
「それなら良いが」
母と同じ顔の伯母は、訝しそうに睨め付ける。
「白鞘か白柄か存じませぬが旗本ともあろう者が町奴の真似事など致して、何何組と名を聞くだけで苦苦しいこと。いずれは某かの沙汰が下ろうから、一刻も早く縁切りなされよ」
良いな、と真弓は念を押す。
念を押した後、伯母は居住まいを正した。
そして、
「この度、若年寄様が交代なされよう」
と、柔らかい女は声を低めてそう言った。
「聞いて――おりませぬが」
内内の話じゃと真弓は更に小声になる。
「すると水野様が引かれるのでございますか。では老中職にでも」
「そうではない」
「では」
子細は知らずとも良い、と伯母はきつく言った。
「知ってどうなるものでもない。縦んば冤罪謀略の類いであったとして、落ち行く者に加担などしても詰腹を切らされるが精精じゃぞ」

「いやしかし水野様は」
父を引き立ててくれた人物である。
「良いか播磨殿。其方様はそれで学は修めておらるるから義じゃ忠じゃと申されるおつもりかもしれませぬが、しかしそれは筋違いですぞ。其方様の主君はあくまで御上。義を尽くし忠を尽くすべきは御上でありましょうぞ。どのような子細があろうとも、下された御意こそ守るべきものぞ。上意に楯突くなど以ての外と弁えよ。もし意見したき気概がおありなら、意見が出来る立場にお昇りになられよ。弓矢八幡、律義一方の三河武士、今の世で戦う気骨を見せようと思うなら」
昇ることじゃと真弓は言った。
「まあ、今の其方様には、いずれ無縁のことじゃろうがのう」
慥かにそうである。
「水野様は亡き弟――其方の父青山鉄山とは昵懇の間柄。鉄山が御老中のお目に留まり、御先手頭から加役本役と昇ったのも水野様の引きがあったからじゃ。もう少し長く生きていてくれたなら、いずれか遠国奉行にもなられていたであろう。とはいえ」
もうその引きはない、と真弓は言った。
「寧ろ、こうとなっては水野様との繋がりが、当家には邪魔じゃ」
そう言うと伯母は顔を歪めた。
「邪魔とはあんまりな」

世話になったことは間違いない。
邪魔は邪魔じゃと伯母は吐き捨てる。
「恩はあっても殉死することはないのじゃ。情をかけるは良いけれど、一蓮托生となることが何の恩返しになろう。無役寄合の其方様などには、何も出来ぬが当然。何もせずとも恩を仇で返したことにはならぬであろう」
播磨は黙るよりない。
「まあ、そういう意味では良かったのじゃ。青山鉄山の嫡子とはいうものの、門番程度のお役しか回って来ぬ無役の其方様が、水野様にお目を掛けて戴いておる――などということは、金輪際あるまい」
声を掛けて戴いたことはある。
だが、播磨の方で避けている。嫌っている訳ではないが、卑屈に愛想を振るような真似は性に合わぬし、気の利いたことのひとつも言えぬのなら話などせぬ方が良い。
顔を合わせてもただ一礼をして去るのみである。
避けているのと変わりない。
伯母は、白く柔らかい首を竦めて、やや前屈みになり、
「次は――大久保様との専らの噂じゃ」
と言った。
「大久保――」

それは飯田町の大久保様でございますかと播磨は問うた。
「左様。大抜擢との噂じゃ。耳にはしておらぬか」
一向に知らぬ。何の興味もなかったからだ。
「其方様、真逆忘れてはおるまいな」
「何を――でございますか」
「嘘恍惚けるでない。先日の縁談のことじゃ」
「いや、あのお話は」
「断わってはおらぬ」
固辞したつもりだったのだが。
断われようかと伯母は繰り返した。
「先方は何不足ないお家柄。否否、不足がないどころか、当家にとっては過分なる程の良縁ではないか。断わる理由など何ひとつなく、ただ当人が煮え切らぬからという呆けた理由だけで破談になど出来よう筈もあるまいぞ」
そうなのかもしれぬ。
ただ厭だで通るものでもないのだろう。
話が滞っておったのは、急な弔事の所為じゃと伯母は言った。
「当主が亡くなられたというに縁組みもなかろうぞ。しかし、既に年も変わっておる」
「それでは」

「勿論、まだ生きておる話じゃ」
「それは――」
どうも思わぬのかと真弓は厳しい声を発した。
「播磨殿。少しは機を見る器量を持たれよ。吾の耳に届いておるのじゃ。表向きは黙しておりようが、寄合小普請の間では疾うに語られておることであろう。しゃんと致せ。其方の縁談のお相手は、次の若年寄の娘御にございまするぞ」
「いや――」
そうなのかもしれぬが。
良縁であることは播磨にも判る。否、千載一遇とはこういうことをいうのだろう。若年寄と知遇を得られれば、いや知遇どころか縁続きになれるのであれば、出世栄達は約束されるだろう。勿論、それだけでは駄目だ。そこが問題なのだ。
縁が続こうが覚えに与かろうが、駄目な者は駄目なのだ。
役職は世襲ではない。実力である。
この場合の実力は、能力ということではない。どれだけ武芸に秀でていようとも、学識が深かろうとも、それはそれである。それだけで奉書は届かない。能があっても才があっても、それだけで登城せよとは言われぬ。
要は――人だ。
人品こそが肝心なのだ。

それも、意気込みだの鼻息だの志だの、そうしたものが肝心なのではない。人格高潔であっても思想高邁であっても、それは矢張りそれだけのものなのだ。

人の中で巧く立ち回る技量――或いはそうした居場所を確保することを億劫がらぬ性向、そうした資質を持ち合わせているか否かが左右するのだろうと、播磨は思う。

だから、どれだけ縁に恵まれようと、最後は播磨次第ということである。

出来ぬことではない。

しかし、続ける自信はなかった。

常に何か足りぬと感じているような男に、重職が勤まるものか。

否、まるきり勤まらぬということはないだろう。播磨は決して無能ではない。加えて真面目でもある。仮令どんな役職に就こうとも、播磨は必ずその職分を熟すだろうと、それは播磨自身がそう思う。ただ。

どれだけやっても、どんなに働いても――。

足りぬと感じるに違いない。

そうなら、どれだけやってもやり切れぬことになる。どんなに働いても働き切れぬことになる。続ければ播磨自身が潰れてしまうだろう。それ以前に、礼節なき無頼漢の群れの中でも浮いてしまうような男が、幕閣の歴歴の中で落ち着ける訳もない。機嫌取りなど出来ぬし、嫌われるくらいなら無視される方が良いと思うてしまう。どうあっても十全な関係は保てぬだろう。相手のことは兎も角も、播磨自身が満たされぬ。

自分には何かが欠けているのだ。

だから他人を満足させることなど出来はしないのだ。

縁組みにしてもそうである。播磨の妻となる者は、必ずや不満を持つに違いない。こんな男に嫁いだことを、やがて悔いるに違いないのである。

足りぬのだ。

播磨がそうなのだから当然である。

誰の期待に応えることも出来ぬ。

「伯母上」

「夏までに祝言を挙げよ」

「夏――でございますか」

「秋口には決まるのです。それ以前に縁を結ぶが得策じゃ」

「いや、それは」

「何が不満じゃ」

何が足りぬと申すのじゃ。

弦を擦るような真弓の声が、突然弾けた。

「不服が申せるお立場か播磨殿。御身を案じ、この青山の家を案ずるこの伯母の気持ちが解らぬのか。次の若年寄様のご息女との縁談、何故に二の足を踏まれる。何が」

何が足りぬ。

何が足りぬのだろう。
伯母は、顔面に穿たれた奈落の井戸を開けて播磨に問う。
播磨はその漆黒の井戸を覗く。
――虚ろだ。
何もない。
この女も、満ちていない。
腹の中は空っぽじゃないか。
気付いていないだけだ。だからこんなに嗔るのだ。
あなたも足りないのですよと、播磨は肚の底でひとりごちた。矢張りこの世界は何かが欠けているのである。伯母も、同じ顔をした母も、皆何かが足りない。父も、朋輩も、若年寄も老中も、皆どこか足りない。三千世界は常に不完全なのだ。
ならば――。
――どうでも良いか。
播磨はそう思うた。
「差し詰め」
大声を上げて播磨は柔らかいものから発せられる音を止めた。
「差し詰め私は何をすれば宜しいのでしょう」
伯母は僅かの間押し黙り、円く口を開けた。

それから。
笑った。
黒い歯が並んでいた。
「その気になって戴けたか播磨殿」
「伯母上は気が早うございます。私此度は一度たりとも否と申してはおりませぬぞ。ただ、余りに急なお話でございましたから、当惑致してはおりましたが」
嘘は、平気で言える。
「それに、四芸葉芸は兎も角も、こうした物事の段取りとなりますと途端に疎く」
心配は要らぬと伯母は言った。
「そこは吾がついておる。そうとなれば早速に算段をせねばなるまいの。なに、其方様は事が相成るまで座して待てば良い。後のことは御側に話す」
十太夫十太夫と真弓は呼んだ。呼び切る前に襖は開いた。
重みの欠けた忠臣が控えていた。
「聞いておったな」
聞いていたのか。
播磨はゆっくりと顔を庭の方に向けた。
仏間から庭は見えない。でも。
庭には、穴が開いている。

昔からずっと。
どうなるのだろう。
――どうなったところで。
あの穴は埋まらない。どうせ何処かが欠けている。足りないことに変わりがないなら。
どうなっても同じだと、播磨は思った。

数えずの娘